

珪素医学研究新しき地平へ



大阪エリアで開かれた
第1回珪素医療研究会

いま、日本

の医学界に珪素研究という新しい潮流が生まれつつある。その中で、このほど日本珪素医療研究会が設立され大阪で第1回の研究会が開かれた。

ら、重要な研究対象となっている。

また化学の分野でも金属精錬における還元剤、脱酸剤としてなくてはならない元素であり、多くの化合物として、高度で多様な役割を果たしており、現在新たな可能性について研究が続けられている。

一方医学分野において最初に珪素の持つ可能性に着目したのは、かの有名なフランスの科学者であり細菌学者だったルイ・パスツールだった。

彼は、こう言っている。「珪素は治療の分野で大きな役割を果たすことができると。」

これ以降世界の大学研究機関において珪素の研究は続けられた。

ドイツのDr. アドルフ・ブーテント教授(1989年ノーベル化学賞)は珪素について、こう指摘している。「珪素は今日も太古も昔も生命の発生に決定的に関わり、生命の維持に必要不可欠なものだ」と。

その後珪素医学の主流はアメリカに移ってゆく。アメリカのエディス・M

近代細菌学の祖

パスツールの予言、多彩な開花

・カーライル博士は、珪素を十分含んだエサと、珪素の少ないエサを使い、それぞれ実験したところ、珪素の少ないエサを与えられたマウスに骨や軟骨に奇形を生じる傾向が増加することを発見。

これにより珪素が骨の形成に極めて重要な役割を果たすことが明らかとなった。

これを受継ぐ形でアメリカの代表的な疫学研究者として有名な「フラミンガム研究」によって、さらに詳細な研究報告がなされた。10数年にわたって行われた結果「食事の珪素摂取量の差が骨密度に及ぼす影響はカルシウムよりも10%近くも大きい」ことが明らかになった。

功。しかも加えてコレステロールが平均26%も減り、インシュリン治療を受けていた糖尿病患者38人中15人が、インシュリン治療を受ける必要がなくなったのである。いずれも僅か1カ月間で。

トム・バスラー博士は、それ以外にも幾つかの珪素による実験を行い、こう述べている。▼肌、髪、爪の老化を防ぐ▼体内あるいは皮膚にコラーゲンを沈着させる

バスラー博士によって、さらに珪素の可能性が拓かれてゆく。博士は900人の患者を対象にして、1カ月間は禁煙のため適度の運動と珪素を多く含んだ高繊維の食事療法を行った。

その結果禁煙効果以外に、肥満傾向にあった患者の全員が平均6Kg減量に成功した。

がん細胞が崩壊されることを指摘。日本の本格的な珪素の医療研究の一つは、化学分野から始まっている。1959年東京工業大学理学部において船木教授・立木博士を中心とした研究チームが、水素と珪素を主成分とする新しい航空燃料の開発着手。1965年その開発は、水素と珪素を融合させることにより新しいエネルギーを誕生させた。ところが、その過程で珪素・珪素塩化合物の高度で多様な特質が明らかになった。活性力・浸透力・還元力・置換力などの面で極めて高い性能を見せたのである。

免疫機能の仕組みの中で大きな作用をしている

・骨粗鬆症の予防、治療に効果が期待できる

・アトピー、花粉症にも効果を示すケースがある

・造血やリンパ球の製成に深く関わりがある

・口内炎や喉の炎症、口臭除去に一定の効果も期待できる

珪素の効用に深い関心を持つ柳本行雄医師は、珪素について「活性酸素を除去し、細胞を活性化させるのに効用が高く、若々しさを保つためのものとして、珪素に勝るものはないのではないか」と述べている。

日本において医学上の珪素研究は世界に比べ立ち遅れていることは否めない。

しかし今後、「日本珪素医療研究会」の設立がきっかけとなり各大学・研究機関

・医師において新たな珪素研究の地平が拓かれてゆくことになりそうだ。

●医療分野では

これら成果を受けて弟子にあたる椋代譲博士が受継ぎ、工業から生物分野たる動物および農業・医学分野での実験を行い、次の結論を明らかにした。

●医療分野では

●医療分野では

●医療分野では